

F ACULTY D EVELOPMENT

I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 20 号

March. 22, 2007

平成 18 年度 山梨大学教育人間科学部 F D 講演会報告 (2007年2月14日)

<勉強>から<学習>へ：学びのスタイルを変える授業とは

(日本人学生のための日本語教育を参考に)

馬場 眞知子 先生 (東京農工大学)

田中 佳子 先生 (日本工業大学)

ヨーロッパの学生と日本の学生を比べると student (学ぶ者) としての姿勢にプロとアマの違いを感じることがあります。今日、日本でも大学教育の質が問われ始めましたが、限られた条件(時間、費用)のなかで教育の質を高めるには学生が学ぶ者の姿勢をもつことが肝要です。そのなかで日本語の4技能(読む・書く・聞く・話す)は大学生の全ての学力の基礎であるばかりでなく、卒業後もコミュニケーション力及び考える力を支える最も重要な能力であり続ける以上、大学教育の中でもその重要性にふさわしい位置を与えられるべきではないでしょうか。

講演に出席・参加して受けたインパクトをまとめると以上のようなこととなります。講演の合間に挟まれた演習を通して、「学生が気づき、学ぶ意欲を持つことで、自ら学ぶ力を身につけさせる」というお二人の意図が文字通り体得させられたことも付け加えねばなりません。

論より証拠。皆さんもまずは以下の演習を試みてください。

次の文章を意味が通るように書き換えなさい！ (一部省略、解答例はp. 4)

でんしれんじでひのたまもくてきでんしれんじをもちいてひのたまをつくるじゅん
びでんしれんじこにかるいびいかあかんそうしたすなたんそせんいほうほうたんそ
せんいをろくせんちくらのながさにきりりんぐじょうにするこにかるびーかーに
かんそうしたすなをごみりめえとるくらのあつさにいれそのうえにりんぐじょう
のたんそせんいをのせるこにかるびいかあをでんしれんじにいれすいっちをいれる
けっかこにかるびえかあのなかにひのたまがふわっとうかびあがります

あるまとまりのある文章をひらがなにすることで教材ができるというのは驚きでした。ひらがな文をリライトする作業を通して、学生は項目の立て方、句読点、漢字の重要性を意識するようになるというのがこの演習の目論見ですが、これはまた「考えさせる教育のコツ」として講演者が挙げた5箇条の具体例ともなっています。以下、その5箇条を挙げます。

考えさせる教育のコツ

- ・じっと待つ
- ・情報を与えすぎない
- ・指示は最低限に
- ・答えはひとつではない
- ・いいところを見つける

大学教員は正確さを信条とする専門の影響でしょうか、教育においても情報を与えすぎる傾向があります。ただ、それでは学生の受け身性を強める可能性があります。学生の能動性を生来させるには、言わずに黙って待つという教える側の忍耐力もときには必要なのではないのでしょうか。

演習のもう一つの例を紹介しましょう。これはペアワークの例です。次のカードを引いたとしたら、皆さんはペアの相手に「雑誌」について説明しなければなりません（禁止語は使わずに）。

単語：雑誌

禁止語：放送、画面、局、番組、新聞

「答えは一つではない」問題の好例です。相手が見事に当てれば、皆さんの説明が正解であったこととなります。大学教員はペアワークに対する不安がありますが、今の学生たちは実は総合学習などでペアワークに慣れているという指摘も貴重でした。

（＜勉強＞と異なり）＜学習＞では何が問われているのか、それに対する答（しばしば複数）は何かを考え、さらには答のプレゼンテーション方法も自分で編み出すことが求められます。要するに、大学教育は、無から何かを創造するような技術と意欲を養成・醸成させる場とならなければならないのです。



講演と演習を二人で行うというパフォーマンスに加え、お二人のエネルギーをもらい、会場は終始うち解けた雰囲気になっていました。残念だったのは、(できるだけPRしたつもりですが)参加者が少なかったことです。自由参加を原則にしている学部FDですが、その限界を認めざるを得ません。日程の選択も含め、今後の課題として残ります。(M)

講演会の感想（参加者へのアンケートから）

- 講演の中で何度も「気づき」があり、大変有意義でした。今後の授業に生かしていきたいと思えます。
- 普段、何気なく使っている言葉（日本語）の力。その力の一つを感じ、体験することができて、自分の視野が広がりました。●また、コミュニケーションの大事さを感じました（これはペアワークやグループワークの際）●相手の求めていること、感じていることを分かろうとするためには必要なことがたくさんある。これは野外教育にも通じるところがあるので大事にしたい。特に「気づき！」「考える！」
- 学生と教師とのインフォメーションギャップを双方向のコミュニケーションで埋めることの大切さなど、多くのことを学ばせていただきました。●ただ、今回の講演を通して特に「気づき」を、自らの授業にどのように具体化してゆくかが、宿題として残りました。
- 最近の大学生は質が落ちている... 少し考えさせられました。
- ワークショップではコミュニケーションギャップの穴うめで配慮が如何に大切な事かを実感・痛感・納得した（聞いたり読んだりしたものから受ける多面的理解、欠落的理解）。
- 学生に考えさせるために、待つこと。●教師は先を急いで、つい走ってしまうことを反省しました。●気づいたことを5コ書かせるのは実行します。
- 自分はまだ学生で、レポートを書いたりするのですが、レポートを書くための日本語が不十分で、またこれまでの教育でそれはあまり養えていなかったように思います。

学部FD活動への要望

- 広報の看板が大書される部外者の目にもとまる故、今回のように以後広報してほしい（はじめての参加者）
- 講演会の出席者をどのように増やしてゆくかが課題ではないでしょうか。

2006年度第2回FDウィーク（授業公開）報告（つづき）

2006年度のFDウィーク後半、第2回授業公開の報告をさせていただきます。小山勝弘先生（保健体育講座）の「健康トレーニング論」です。（T）

第2回FDウィーク公開授業（その2）：「健康トレーニング論」

[授業者の思い]

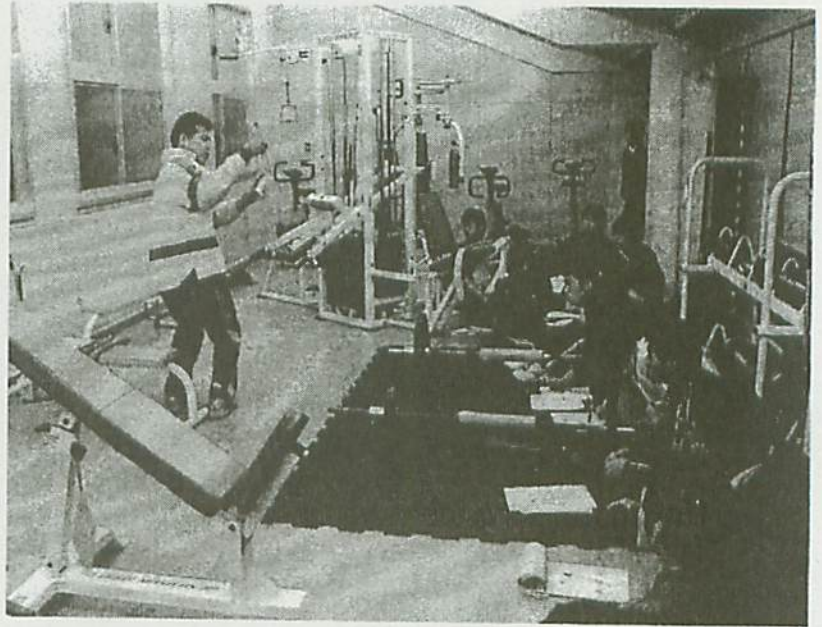
保健体育講座 小山 勝弘

「健康トレーニング論」は文字通り、健康づくりのためのトレーニングについて学ぶ授業であるが、決してスポーツ選手だけを視野に入れたものではない。授業タイトルからは特殊な、特定の集団にのみ必要とされるものという印象が強い。しかし「トレーニング」を「身体活動」と置き換え、さらに身体活動は「日常生活行動」の包括概念であると捉えれば、健康づくりのための動き方や、生活行動の工夫について学ぶ授業であるといえる。つまり一般に還元できる内容を扱っている。

人の「動き」は最終的に、筋肉と骨・関節によって生み出される。どのような動きにどんな筋肉と骨・関節が関わり、その際に感じる「感覚」はどのようなものであるかを機能解剖学的に理解することは、正しい（障害を生まない）動きの獲得に必須の条件である。この授業ではスポーツ選手から高齢者まで広範な対象を念頭に置いて、「動き」を通しての健康づくりに関する知識と技術を学んでもらっている。一見難解に感じられる機能解剖学も、実際に動かして、関与する

筋肉、骨・関節に触れながら学習すると大変理解しやすい。さらに人体解剖写真や模型などを多用することで、スムーズな理解を促すよう工夫を行っている。また学生個々に「動き」の「感覚」は異なり、それを表現する言葉も多種多様であるため、積極的な双方向コミュニケーションを図る努力をしている。

授業は実際の動きを通して「感じて」もらう必要性から体育館のトレーニングルームで行う。しかしそれは体育館片隅の倉庫を転用した、教員研究室の2倍程度のスペースしかない狭隘な環境である。学生の安全確保を最優先した非常に窮屈な授業展開が余儀なくされる。この点は修学環境の整備、教職員への福利厚生、地域住民へのサービスなどとも絡めて、是非早急に改善していただきたい点である。



[授業参加者の感想]

- 説明それぞれに具体的な例示が必ず伴っていること、学習の目的や意味を彼らとの関連性や現代的意味と関連付けて提示していること、視覚にうったえるやり方で筋肉のメカニズムを理解させていることなど、さまざまな工夫がありました。
- 事故が起こると大変なことになるので説明は正確で、必ず理解させるというスタンスがありました。なごやかな雰囲気の中でも学生はみな真剣だったのが印象的でした。もう少し設備が立派にならないかと感じました。
- 理論と実践が一体となった分かりやすい授業でした。特に筋肉・骨・関節の動きを示す手づくりの模型教材はとても効果的で、自分の授業にも取り入れてみたいと思いました。
- 授業場所が体育館の片隅で、改修前よりは広がったとのことですが、学生の安全確保のためにも適切なスペースが必要だと感じました。

1 頁の解答例

電子レンジで火の玉！

目的：電子レンジを用いて火の玉を作る。

準備：電子レンジ、コニカル・ビーカー、乾燥した砂、炭素繊維

方法：炭素繊維を6cmくらいの長さに切り、リング状にする。コニカル・ビーカーに乾燥した砂を5mmくらいの厚さに入れ、その上にリング状の炭素繊維を載せる。コニカル・ビーカーを電子レンジに入れ、スイッチを入れる。

結果：コニカル・ビーカーのなかに火の玉がフワッと浮かび上がります。